

## さまざまな図書館との幸福な出会い

図書館長 小笠原 祐子 (教授 社会学)

思えば、ライフステージの各段階でさまざまな図書館との出会いがあった。最初の図書館として記憶しているのは、小学校のものである。1・2年の担任の先生が国語教育に熱心で、図書館で本を借りて感想文を書くと「よい子」シールを1つ貼ってもらえた。薄倖な少年・少女の物語がそのときの私のマイブームだったのか、立て続けに『小公子』、『小公女』、『家なき子』、『家なき娘』などの本を借りたら「もっといろいろなタイプの本を読むように」と指導されたことが遠い記憶にある。

中学校や高校の図書館では、もっぱら小説を借りていた。当時はまだ貸し出し手続きが電子化されておらず、本の最後のページに貼付された袋の中の貸し出しカードに返却日時のスタンプを押してもらおうという形式だった。この貸し出しカードを眺めるのもちょっとした楽しみだった。と言うのも、そのカードを見れば、誰が自分より先にその本を借りたかがわかるからである。予想外の人物が予想外の本を読んでいたのを発見したときなど、実際に話をしたことがない同級生であっても、本を通して小さな秘密を共有したような気持ちになったりもした。

大学では、初めて閉架式図書館に出会った。本がずらりと並ぶ棚を歩き来して、あれにしようか、これにしようか、迷いながら選ぶ楽しみがなくなって、少しつまらなく感じたのを覚えている。そのためか、大学図書館は主にレポート作成のために利用した。

大学卒業後、数年の会社勤務を経てアメリカの大学院に進学した。この大学院時代は図書館なくして語ることはできない。初めての授業で、リーディング・アサイメントのあまりの多さにうろたえ、授業のノートを満足

に取れないことに愕然とした。考えてみれば、英語でノートを取った経験がなかった。教授の話を中心して聞けば手が動かず、書くと話が聞こえてこない。テープレコーダー（当時はまだICレコーダーはなかった）を教授の許可を得て授業に持ち込んで録音を試してみたものの、あとで聞き返すには膨大な時間がかかり、その方法は早々に放棄せざるを得なかった。このままでは授業についていけないと途方に暮れていたとき、唯一の頼みとなるのが図書館であった。図書館に行けば、わからなかった個所を調べるための本があり、助け合う仲間がいた。特に仲良くなったのは、韓国やタイなどアジアからの留学生である。互いに語学にハンディがある身、それぞれに不完全なノートを持ち寄っては、図書館のスタディ・ルームで一緒に勉強したのを懐かしく思い出す。期末試験前ともなると図書館で過ごす時間はさらに増えた。まわりの建物から電気が1つ1つ消えていってあたりが暗闇に包まれても、図書館だけはまるで不夜城のように深夜まで煌々と明かりががついていた。

帰国してから勤務した大学の図書館は、研究の頼もしいパートナーである。当初は学会誌等の論文を片っ端からコピーしていたが、最近では電子ジャーナルが普及してとても便利になった。またこの当時、新たな図書館との出会いがあった。子どもが生まれて、地域の図書館に絵本を借りに足繁く通うようになったからだ。夫と私と娘、3人分のカードを作り、毎回借りられるだけの絵本を借りてくる。『ぐりとぐら』や『ちいさいおうち』など、その昔、母が読み聞かせてくれた絵本との嬉しい再会もあった。

日本大学経済学部の図書館は、開架式と閉架式のバランスがほどよく、私の大学時代の図書館とは異なり、閉架式の書庫にも立ち入ることができる。新入生の皆さんにとって、図書館が1日も早く学生生活の一部となり、図書館との出会いが幸せなものになることを切に願っている。